
輪廻の恋歌

笹川 猫ノ介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻の恋歌

【Nコード】

N7087Y

【作者名】

笹川 猫ノ介

【あらすじ】

この世に生を受けて、
6人が出会って、

恋をして、

誰かが傷ついて、

誰かが喜んで、

誰かが壊れる、

誰も傷つかない、誰も壊れない、みんなが喜べる世界までただ輪廻
転生を繰り返す小さな魂たちの物語――

アメブロ「*灰色Days*」にて散らし書きした小説です。

登場人物

悠亜 ゆうあ 千影 ちかげ 町立千秋東中学1年1組 13歳
悠亜 ゆうあ 千太郎 せんたろう 千太郎国立悠亜大学付属高等学校2年B組 17歳

斉藤 さいとう 神奈町立千秋東中学1年3組 12歳
斉藤 さいとう 誠司国立悠亜大学付属高等学校1年A組 17歳

千条 せんじょう 伊吹国立悠亜大学付属高等学校2年B組 16歳

月見里 やまなし 桔梗国立悠亜大学付属高等学校1年C組 15歳

教室

「晴れた金曜日の午後3時というのは起きなければいけない、と頭ではわかっていても眠たくなってしまふものだ。しかもそれが社会の時間ならほぼ間違いなく意識は夢の世界へと旅立ってしまう。どこかの国では金曜日と月曜日の車は作業員が気を抜いているからネジが緩い。だから買უნ、という話がある。金曜日、一週間の疲れがたまった作業員は明日の土日をどのようにすごすかで頭がいっぱいになり、結果ネジが緩んでしまうということだ。これはなにもその国だけに通ずるものではない。日々多忙な生活を強いられている学生と社会人も同様だ。一週間仕事、勉強、学生なら塾や予備校というオプシオンもついてくる。一週間の疲れがたまった金曜日の6時間目はもっとも眠たくなる。だから、私が今社会の授業中に昼寝をしたのは仕方がないこと」

私はそこまで一息で述べると北原先生に答えを求めるように睨む。北原先生（社会教師、北原奈々。32歳独身）はチョークを持ったまま私の目をみつめながらポカンとしている。

状況説明。

金曜日の6時間目。

12月にしては珍しく暖かい日だったので、一週間の疲れがたまっていた私はついウトウト……数分後グー。私の意識は気がついたら夢の世界へと旅立っていった。

で、それに気がついた北原先生は、数秒単位の短い話をつなぎ合わせて一つの長い夢を見ている私の頭へむかって白いチョークを投げつけた！

チョークは寸分の狂いもなく私の頭に当たって、軽い音を立てて割れた。北原先生はその攻撃で私が起きなかったときようにもう一本

をチョークを構えて私の反応を待っていた。

その攻撃は私の意識を覚醒させるには十分だったようで、すぐに私は目を覚ました。

そしたら、北原先生が『どうして寝ていたの?』と半ば怒り口調で訊ねてきたから、私は金曜日の6時間目がどれだけ眠たくなるかを北原先生に教えていた——と、いうこと。

しばらく待っても、先生はうんともすんとも何も言わない。

国語教師の前田先生なら脊髓反射で言葉を返してくるが、まったりの性格に定評のある北原先生は何も答えてくれない。

仕方なしに、私はため息をついてから言葉を出す。

「私の言いたいことは以上です。しばらく待ってみました、もうすぐ授業が終わるので、先生の答えを待たずに終わることにさせてもらいます。じゃあ、反論があるなら放課後に」

何を終わるんだよ、と心の中で自分の言葉に毒を吐きながら締めくくりを言う。

グルリと、教室全体に目を動かして呆気にとられる同級生の顔を見た後、最後に北原先生をキッと睨みつけた。

すると、まるでマンガのようなすばらしいタイミングで授業の終わりを告げる鐘が学校内に響き渡った。

名前は知らないが英国の、大きくて有名な時計の鐘の音らしい。鳴り終わる前に、学級委員長が音を立ててイスを立ち上がった。

それに続いてほかの生徒も立ち上がった。

「きりーつ。れーい。ちやくせーき」

学級委員長の気が抜けた号令で授業は終わった。

6時間目が終わったあとは掃除の時間。

私はどこの掃除だったっけな——

黒板の横に貼り付けられた掃除当番表を見る。

私は2班だから……

げ、
トイレ掃除だ。

斉藤神奈

「派手にちーちゃん怒られてたね」

「ん？そうかな？あんまり怖くなかったけれどね」

「えー私は怖かったよ」

中学生年相応の黄色い声をあげているのは、黒いツインテールが非常によく似合う斉藤神奈だ。

神奈は、家が近所だったこともあって、幼稚園のときからずっと一緒だ。いわゆる幼馴染。

憎たらしいほど真っ白でほそっこい体。さらにこれまた憎たしくなるほどのクリクリお目目。

我が校は私服なので、女の子らしい白いスカートが非常によく似合っている。

女の子らしい、といった言葉をまるまる擬人化したような存在だ。

「でもさーちーってすごいよねーよくあんだだけの文章をその場で思いつけるね」

トイレの床をこするデッキブラシを動かしたまま神奈は感嘆の声をもらす。

私は私で、水道のカビ取りをする手を休めぬまま口を開く。

ああ、水が冷たい……！

「でもさ、あれくらい即興で思いつかないとこれから先やっかいかもよ」

独り言感覚の私の言葉に、ビクリと、神奈の体が反応する。

デッキブラシをこする手を止めて、少し青ざめた顔で私を見据える。そしてデッキブラシを壁に立てかけてつかつかつかと、私の元へ一直線に歩み寄る。

——え？

突然の行動に、私はカビ取りの手を止めて神奈を見たまま動かなく

なった。

神奈の歩き方は、まるでこう……簡単にたとえるなら……そう、…
…たとえば、私が女王に反逆をした罪人で、神奈が、その女王で、
取り押さえられた罪人に近寄ってそのまま、絞め殺しそうな勢いで、
…ああ！もう何が言いたいのかわからなくなってきた。

気がつくと、神奈の顔がくつつきそうなくらい近くにあって、思わず私はヒィ！と叫んで後ろに少し退く。

神奈は、私のそうした反応に何も興味を示さず私の目をじっと覗き込む。

神奈の目は、ドロンとしていて、死んでる人の目みたいで、生気がやどってなくて。

声を出せずに、そのまま視線をはずさず神奈を見ると、神奈が口を開いた。

「そんなこと言ったら私高校いけないじゃん！！！！！」

……はあ？

「はあ——！！？！！？！！？」

数学50点

「いや、大丈夫だよ……これくらいでなくなたって……うん」

「ダメだもん……!」

ダメだもん、とは可愛らしい奴である。

さっきまでの殺気立った恐ろしい雰囲気から一転、今にも泣きそう
な、てか涙を目にいっぱい浮かべている。

至近距離でそんな顔をされたら、私のSな部分が疼いてしまう。

いじめてやろう……と、思ったがSな部分と同時にやさしい部分も
疼いてしまったようでいじめようにも言葉が思いつかない。

泣かれたら色々と困るので、私は神奈の頭に手を置いて撫でてやる。

「大丈夫だつて。私だつて数学50点だもん」

私の脳裏には一学期期末テストの答案が浮かび上がる。

比例、反比例、比例と反比例の利用、方程式。

1個2点問題で50問。

赤色でつけられた25個の×。

思い出すだけでも胸が痛くなる。

塾でも怒られ、家でも怒られ。

数学ができる兄と比べられることはとても辛かった。

——でも社会は満点だったもん

「神奈は数学92点でしょ、大丈夫!大学受験とかで大切なのは数
学だから!」

「本当!?でも前ちーちゃん『国語と社会できないとか日本人的に
死んでるだろ』って笑ってたじゃん——!」

「あれ?そんなこと言った?」

言った記憶はある。

確か1学期の中間試験のときだ。

そのときのなんでもない一言が、今の私にはとても憎たらしくなつた。

このままいると、次に神奈が何を言い出すのかわからないので私はスポンジを流し台に置いて神奈の手を引っ張る。

幸いにも、掃除時間はもうあと2分だったので手を引っ張ったまま私は教室へと戻った。

3組では帰りの会はほとんどないので、掃除が終わると荷物をカバンにいれてそのまま部活へ行くことができる。

神奈は陸上部に入っていて、県の大会で2位を獲ったりする陸上部期待の星である（本人曰く）

ちなみに私は文芸部。

でも、週に3日しかやらないのでほとんど活動実績はない。

やる気がある子は、自分で小説を書いて自分で応募する、といった形だ。

そんな部だと、部活としては認められないのではないかとよく訊かれる。

しかし、一応は文化祭などのときには雑誌を発行しているので部活動として認められている。

ついでに言つと今日は部活無し！

悠亜イチヨウ公園

学校から出ると、すぐそこには一本のおおきなイチヨウの木が生えた公園がある。

公園の名前は『悠亜イチヨウ公園』。

私の名前、悠亜千影の一部が入っている。

何でも、この公園をつくったときに私のおばあちゃんが多額の寄付金を出したそうで、そのお礼にと、おばあちゃんが遠慮したにも関わらず名前をいれたそうだ。

私の家——悠亜家はこの悠火町の中ではかなりの名家らしくて、よく町の偉い人がおばあちゃんの家に来たりしている。他にも、私が通っている学校の土地、本当はおばあちゃんの家土地だったらしくて、この学校を建てる时候にも土地を町に寄付？したらしい。

名家、ということと悠亜家にはたくさん家訓らしきものがある。

たとえば名前。

悠亜家を継ぐのは長女。

今の頭首のおばあちゃんは千代って名前で、12代目の頭首だ。

私のお母さんは、千子で本来ならば、13代目の頭首になるはずだった。

だけど、私のお母さんは、家を継ぐ、13代目の頭首になる前に、交通事故で死んでしまった。

私がまだ小学校に上がる前に死んでしまった。

だから、私が13代目の頭首となった。まだ、13歳なのにね。

でもおばあちゃんはもう89歳だし、いつ死ぬかわからない状態だし仕方がない。

で、名前について。

悠亜家を継ぐ者は『千』か『悠』の字をいれなければならない。
なぜ、千と悠なのかは知らないが、そう決まっているのだ。

だから、おばあちゃんの名前にも千がはいつていて、お母さんの名前にも千がはいつていて、私の名前にも千が入っている。

他にもいろいろと家訓らしきものがあるのだが、あとは説明がめんどうなものばかりなので省く。

おばあちゃん曰く、戦前悠亜家の何代目かの頭首が工場かなんかで大成功を収めたらしくて、その後の戦争や財政解体や不況なども乗り越えて今日まで至った——らしい。

私のおばあちゃんが寄付金を払ってつくられた公園には、ブランコやシーソー。砂場に滑り台と鉄棒などの器具がそろっている。

そのうえ、トイレやベンチまで揃っている！すごいだろ！（え？当たり前？）

数年間、風雨に晒されたブランコは赤茶色に錆びている。

そこによいしょ、と座って学校の青いカバンから一冊の文庫本を取り出す。

題名は『歪の恋歌』

親友の女の子2人が同じ人に恋をして、1人は必死で我慢するのだが、もう1人は我慢せずに告白する。

相手の男は、2つ返事でオッケーをしてしまう。

それを知った女の子が精神的に病んでしまつて、2人を惨殺してしまう——という残酷ホラーの小説だ。

それを読みながら、お兄ちゃんと、お兄ちゃんの友人である伊吹さんと神奈と桔梗と誠二さんがくるのを待つ、のが私の部活がない日の日課だ。

お兄ちゃんと千条伊吹

お兄ちゃんとは、現在高2の私の兄だ。

名前は、悠亜千太郎といって、悠亜家の長男だ。

残念ながら、悠亜家は代々長女が継ぐことになっているので悠亜家を継ぐことはできない。

お兄ちゃんは、才色兼備っ子だ。

だって、高校受験だって楽々の1位で合格だったし、顔もカッコいい。

いや、カッコいいじゃない。とてもカッコいいんだ。それで優しくて喧嘩も強くて肝が据わっている。

焼けすぎ……とはいはないけど、かといって白すぎない男のくせに陶器のような肌。

女の私が羨ましくなるくらいの、黒くて艶やかな髪の毛。

ちよっとつり上がっているガラス玉みたいな目。

妹の私でさえ、時折息を呑む。

まあ、……あれでオタクで妹にぞっこんという残念な性格さえなかったら完璧なのにな。

伊吹さんは、お兄ちゃんと昔からよくつるんでいるお兄ちゃんの悪友だ。

ただ、2人でいっしょに悪さをするのではなくて、お兄ちゃんがいつも悪さをするのに誘っている。で、伊吹さんは不承不承それはいっしょにしている。

……まあ、悪さをしていることに変わりはないけれど。

成績もそこそこ。顔は……すくなくとも私から見ればカッコいいと思う。

ちよつと固めのくせつ毛。

DSの人が浮かべるようないじわるな笑みか、優しい笑みかわからない表情。

服装も、着崩しているお兄ちゃんとは違っていて、キチンと綺麗に着ている。

そのくせ、たまに寝癖を直し忘れていたり、カバンを家に置いたまま学校にきていたりする。

意外と、抜けているところもある人なのだ。

ホント、みためヤンキーのお兄ちゃんとどうしてここまで仲良くなれたのかが不思議だ。

私は、本から少し視線を動かして、公園の時計へと目を向けた。
5時30分。

そろそろお兄ちゃんと伊吹さんと桔梗と神奈が公園にくる時間だ。
微妙に抜けた伊吹さんが気づかないでそのまま帰ってしまい、待ち惚けを食らう（2回ほどあった）のが嫌なので、文庫本を閉じてベンチから腰をあげた。

月見里桔梗と斉藤誠司

腰をあげた私は入り口へと向かって、幼稚園くらいの子供の背丈くらいの門に少しだけ凭れ掛かる。

学校のカバンを足元へ置いて、道路を挟んだ向こうに目をやる。

向こう側は悠火町でもっともにぎやかな場所である、悠火町商店街だ。

服屋、本屋、雑貨屋、魚屋、八百屋、塾、飲み屋そのた諸々が揃う場所だ。

夕方の今は、晩御飯のおかずを買いに来た主婦で溢れている。

あと、塾へ向かう中学生と小学生。残念ながら商店街に予備校はないのだ。

財布握り締めたおばさん軍団の少し後ろから、身長バラバラの4人組が歩いてくる。

3人が男、残る1人が女だ。

4人とも、悠亜大学付属高校の制服を着ている。

1番端の、この季節になってもまだマフラーをつけていないのは間違いなくお兄ちゃんだ。

私が編んだマフラーを巻くために、完成までマフラーを巻かないらしい。バカみたい。

その隣の、赤いメガネをかけたショートカットをしててチェックのマフラーを巻いているのは桔梗だ。

健康的に焼けた肌。

目元の2つの泣き黒子が桔梗だと、教えてくれた。

で、その横が斉藤さんだ。

斉藤という苗字が示す通り、神奈の兄だ。誠司という名前。

顔つきもよく神奈と似ている。

本当ならば、お兄ちゃんと伊吹さんと同じ高校2年生なのに、成績悪&出席日数不足で進級できなかった可哀相な人だ。

で、一番端が伊吹さんだ。
黒のマフラーの端にやたらと泥がついているのに気づかないのだからか？

周りの人も気づかないのかな？
あ、黙っていた方が面白いから黙ってるんだ。

と、そこで桔梗と目があつた。

黒くてガラス玉みたいな目が私を見つけると、ニヤ〜と桔梗特有のいじわるっぽい笑みを浮かべて私に手招き。

——ちかっち〜おいで。
目がそう語っていた。

私は小さくうなずき返してから、カバンを引っつかんで道路を飛び越え、商店街へまっしぐら！

商店街

「いや〜今日は寒いね〜ちかりん〜」

桔梗はおじさんみたいな笑い顔で私の肩に手をかける。

制服の中に突っ込まれた手が、氷のように冷たくて若干濡れていた
ので私は少しだけ吃驚。

「うわ！ききよっち冷たい！何でこんなに冷たいの？」

「ええとね〜桔梗さんは心があつたかいから〜ほら、心があつたか
い人って手が冷たいでしょ〜」

なるほど、と納得しかけたところでお兄ちゃんが口を挟んできた。

「いや、コイツさっきまで氷握ってたぞ。『ちかりん吃驚させるの
〜』とか言いながら」

と、お兄ちゃんはさっき受け取ったらしい石ころ大の氷を取り出す。
なるほど、だから手が濡れていたんだ。

「ちよっと〜言うなよ〜お前常識的に考えろよ〜」

「ええ〜だって俺の妹が冷たい思いして風邪ひいたら……ゲフツ！
桔梗がお兄ちゃんから氷を奪って、氷を握り締めた手でお兄ちゃん
のわき腹へグーパンチ！

お兄ちゃんはゲフツとバカみたいな叫び声をあげて、わき腹を押さ
える。

それでも、桔梗の攻撃はやまない。蹴って、殴って、チョップして

……

「てかお前これくらいのこと風邪ひくおもってんのか!？」

「思ってるよ！千影はこう見えて体弱いんだよ！」

「嘘つけ！ちかりん確か小学校のとき皆勤賞もらってたよな!？」

「それは我慢してるだけ！本当はお腹を壊してたりタンスの角に小
指ぶついたりして休んでもおかしくないようなことはいっぱいあっ
た！」

「それはお前が過保護なだけだ！どたわけ！！お腹壊すとか日常茶万事だろ！」

高校生がするとは思えないバカバカしい会話に思わず私は吹き出す。お腹を押さえて、大声で笑いたくなるのを我慢しているのは、斉藤さんも伊吹さんも同じみたいで肩を震わしている。

抑えた声が、涙となってでてきたように笑い泣きをしてしまう。

「何笑い泣きしてんだよ！？こちら真剣なんだよ！！！」

「いや、真剣だったの！？」

——あれで真剣！？——

伊吹さんも斉藤さんも私と同じことを思ったらしく、今度は声をこらえきれずに大声を出して笑った。

——こんな時間がずっと続けばいいのに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7087y/>

輪廻の恋歌

2011年11月26日21時56分発行